

新しい富士見町の考古館建設と 井戸尻遺跡群の保存活用に向けて

富士見町 新井戸尻考古館基本計画



令和6年(2024年)12月

長野県諏訪郡富士見町

目 次

第 1 章：基本構想	1
（1）計画の主眼	
（2）富士見町の「まちづくり」の中で	
（3）施設の概要と課題	
（4）新考古館のめざす姿	
（5）新考古館の基本方針	
第 2 章：施設計画	11
（1）施設計画の方針	
（2）財源と施設整備の考え方	
（3）想定される規模・建築面積	
（4）立地環境	
（5）建築計画	
（6）施設の機能	
（7）配置イメージ	
第 3 章：展示計画	23
（1）展示の方針	
（2）それぞれの展示計画	
（3）展示の構成とテーマ	
（4）遺跡と展示とが連携する施設計画／活動計画	
第 4 章：活動計画	29
（1）活動計画の概要	
（2）活動計画	
第 5 章：新館建設に向けて	31
（1）建設費用の概算	
（2）建設事業スケジュール	
（3）新井戸尻考古館建設専門委員会名簿	

第1章：基本構想

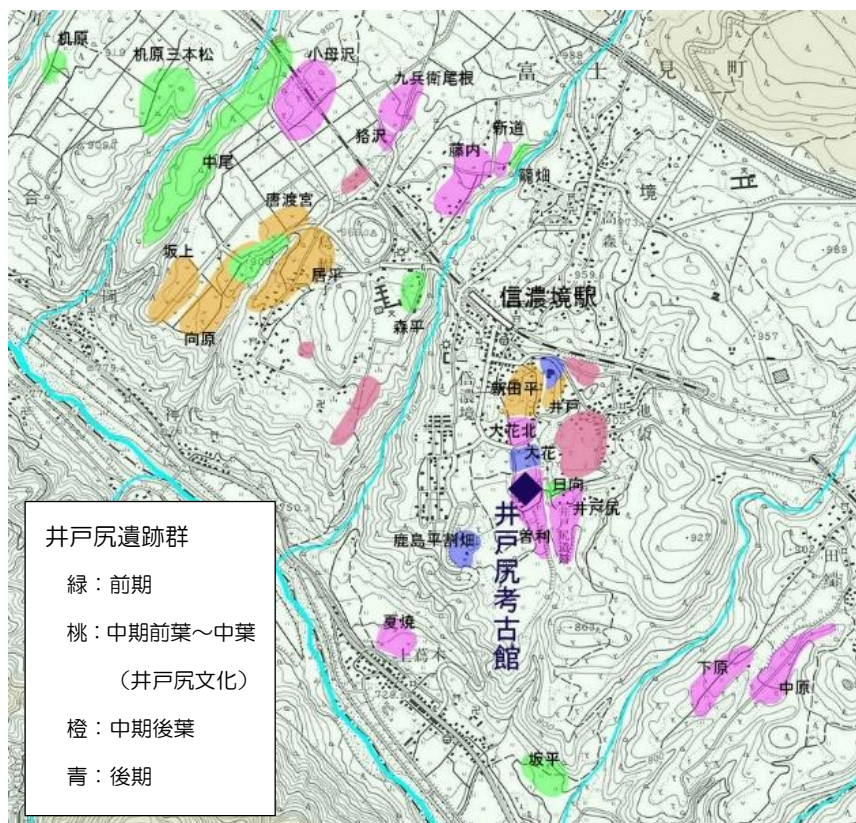
(1) 計画の主眼

富士見町の風土と歴史 ～八ヶ岳南麓と縄文王国

八ヶ岳の西南麓は、「縄文王国」と呼ばれるほど縄文時代の遺跡、とりわけ縄文時代中期の遺跡が稠密で、発掘された集落跡や石器・土器が高い文化水準を示すことが良く知られています。こんにち、その生活文化に対し、遺跡の名をとって「井戸尻文化^{いどじりぶんか}」という表現が定着してきました。この文化は縄文時代中期中葉(約5千年前)に中部高地から西南関東にかけて広がっていました。その核となっているのが八ヶ岳西南麓であり、さらにその中心に位置するのが、昭和41年(1966)に国史跡に指定された井戸尻遺跡をはじめとする遺跡群です。井戸尻遺跡の周辺3km四方には曽利遺跡、藤内遺跡など、学史にその名を刻む重要な遺跡が集中しており、これらを「井戸尻遺跡群」と総称しています。

富士見の地で発掘調査を行い、研究を積み重ねてきたのは、中央の研究者ではなく、地元の人びとでした。現在の井戸尻考古館はその延長にあり、多くの先人たちの努力により、「独自の研究を続ける考古館」として国内外に名を知られています。

また現在の富士見町域では、主として平安時代以降に、活発な人びとの生活や活動の痕跡が認められます。中世には現在の集落につながる村が形成され、近世には街道や宿場が整備されるとともに新田開発も進められました。近代には生活の変化にともなって道路や鉄道が開かれ、今の富士見町が形づくられていきました。



“おらあとう”の考古学 ～縄文研究をリード

井戸尻遺跡の最初の発掘調査は、昭和33年(1958)の春。「おらあとうの村の歴史は おらあとうの手で明らかに」という考えのもと、大学の先生や中央の研究者ではなく、在野の考古学者に指導された地元の人々と高校生が、発掘調査を行いました。

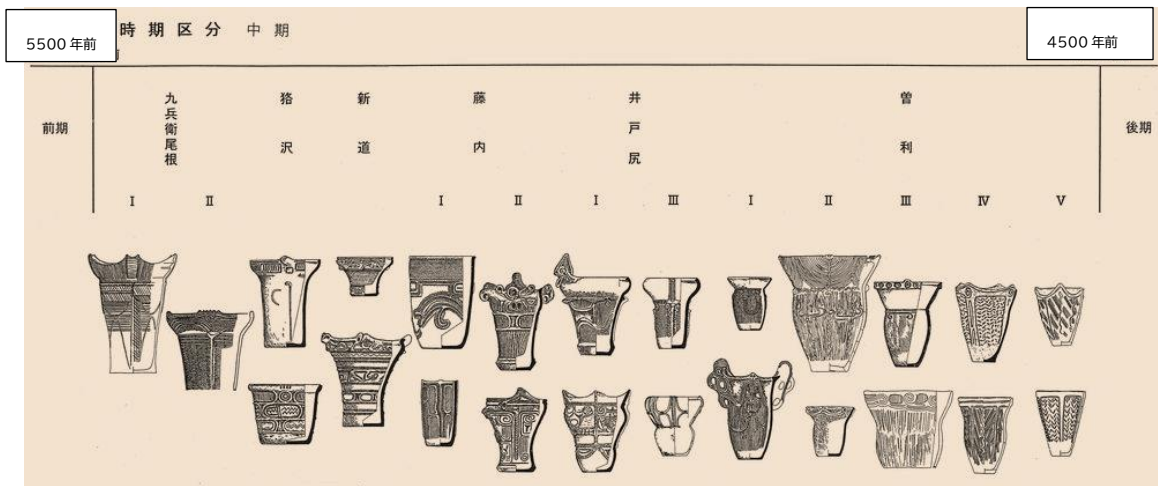
その後、直ちに「井戸尻遺跡保存会」が結成され、発掘調査・研究を進めました。その成果は富士見町役場の境支所を間借りした井戸尻考古館に展示され、昭和40年(1965)に町に移管されるまで、有志の手で運営されてきました。

机上の議論ではなく、自ら縄文人に近づこうとする井戸尻考古館による个性的かつ実践的な研究は、日本の縄文研究をリードするとともに、一般の方々が縄文文化についての理解を深める上で重要な役割を果たしてきました。学会や高名な教授に迎合しない、独自の立ち位置が評価されています。

縄文農耕論：縄文人は単なる「狩猟採集民」ではなく、原初的な農耕を営んでいたというもの。現在では、ある程度の植物栽培がおこなわれていたことが認められています。

縄文図像論：縄文土器の文様はただの飾りではなく意味のある図像であり、これを読み解くことで当時の精神文化や習俗を知ることができるという研究姿勢。考古学の枠をこえ、人類学、民俗・民族学、神話学などを総合的に取り入れ、「縄文人を知ろう」とするものです。

井戸尻編年：時代ごとに特徴的な土器の文様や形状から、代表的な遺跡の名前をとって「〇〇式土器」と名付けられ、これを時代順に並べて時代をはかる「ものさし」をつくるのが、考古学の基本となり、これを土器編年(へんねん)と呼びます。中部地方の縄文時代中期の土器編年は、この井戸尻遺跡群を舞台に編まれました。土器の型式は、古い方から「九兵衛尾根式」「猪沢式」「新道式」「藤内式」「井戸尻式」「曾利式」と、すべて富士見町の井戸尻遺跡群の遺跡で構成されています。これは土器編年の設定が、先駆的に井戸尻考古館とその周辺で行われ、これらの遺跡が土器型式の「標式遺跡」となったことによります。

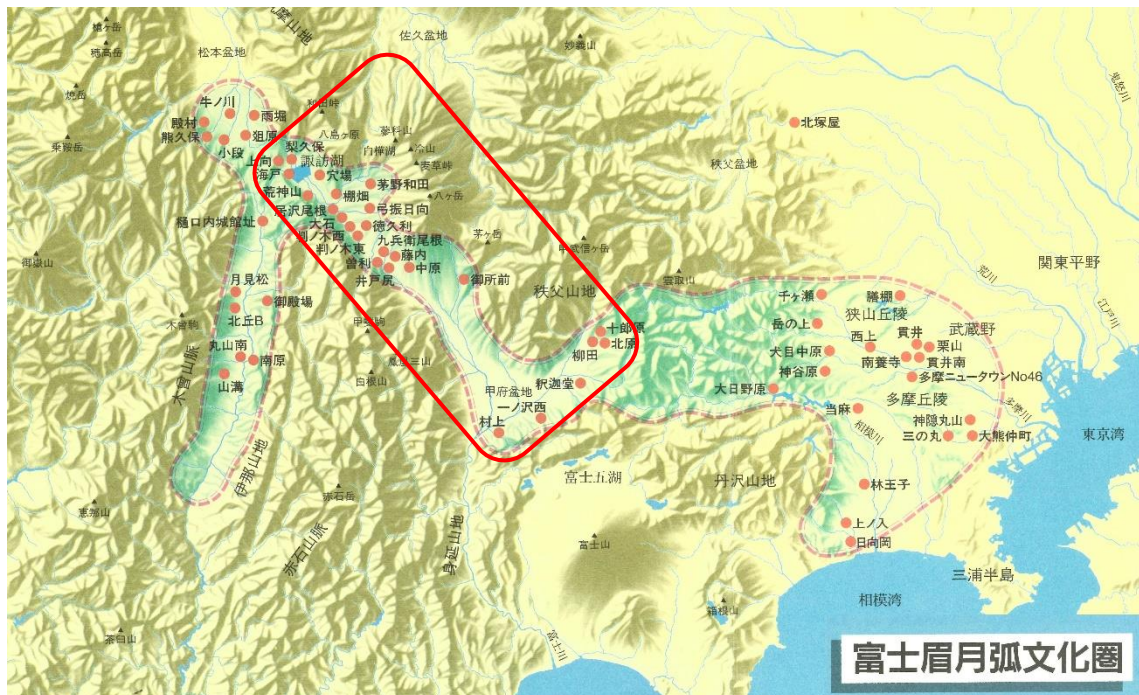


縄文時代中期の土器編年表

井戸尻文化の中心地 ～富士見町の遺跡

井戸尻文化の最盛期は縄文時代中期中葉の藤内期で、この土器の広がりや井戸尻文化の広がりをとらえる指標になります。中期初頭の九兵衛尾根期から、文化が変容する曽利Ⅱ期の前、曽利Ⅰ期までの遺跡をひろってみると、この文化は八ヶ岳西南麓地域を中心に、中部高地から西南関東にかけて広がっていたことがわかりました。

その広がりや富士を片方の眼に見立てて、両の眉を連ねたような弧形をなしています。世界の農耕文化に深くかかわる場所が「肥沃なる三日月地帯」や「東亜半月弧」など月になぞらえられていることに倣って、井戸尻文化の広がりを「富士眉月弧」と呼びます。



赤枠が 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」認定範囲

その後の研究により、富士眉月弧文化圏の中で、縄文時代中期初頭から中期末までのおおよそ1,000年間、人が住み続け文化の中心であったのが、松本盆地の南縁から甲府盆地の東南縁にかけての、およそ100kmの範囲であったことが知られるようになりました。これは平成30年に認定された日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の範囲におおよそ重なります。

その中核をなすのが長野県茅野市・原村・富士見町と山梨県北杜市にかかる八ヶ岳西南麓地域であり、さらにその中心に位置するのが井戸尻遺跡群なのです。多様な打製石器を用い、精神的豊かな土器造形を残した井戸尻文化の中で、文化内容からだけではなく、地理的な広がりからみても、この井戸尻遺跡群こそがその中心地であったことが明らかにされています。

縄文王国などともいわれるほど遺跡の多い八ヶ岳の西南麓は、古くから研究のフィールドとしても良く知られてきました。しかし近隣の市町村では、平成の終わりまでに大規模な構造改善事業などの開発のために、数多くの遺跡が失われてしまいました。現在、八ヶ岳山麓で最も遺跡の残りが良いのは、富士見町域です。

4

遺跡の保護と活用 ～井戸尻遺跡群の現状と課題

井戸尻遺跡群のある富士見町境、落合地区では、大規模な構造改善事業が実施されなかったり、あるいは工事が遺跡のある尾根の頂部に及ばなかったりするなど、周辺地域に比べれば遺跡は護られてきました。しかし昨今、相続や後継者不足による耕作放棄地も目立つようになり、そこに個人住宅開発や太陽光発電施設の建設など、遺跡保護の新たな危機の波が押し寄せています。

富士見町教育委員会では平成28年(2016)に「井戸尻考古館・歴史民俗資料館の将来構想と長期計画」を策定し(令和3年度改定)、館の将来構想とともに、遺跡の保護についても検討を重ねてきました。また平成30年(2018)には文化財保護法が一部改正され、文化財の総合的な保存活用についての方向性が示されています。

井戸尻遺跡群においては、井戸尻遺跡が国史跡に指定され、史跡指定範囲の周辺も含めて公有化がすすめられ、現在は史跡公園として親しまれるとともに、普及教育の場としても活用されています。いっぽう藤内遺跡と居平遺跡はその一部が町史跡に指定されて保存されており、藤内遺跡は令和2年より公有化を進めていますが、整備計画は進められていないのが現状です。

また曽利遺跡では令和3年(2021)より国庫補助を受けて保存を目的とした試掘調査を行いました。これらにより遺跡の重要性が改めて知られることとなり、今後、保存を進めるべき埋蔵文化財として文化庁が令和5年に公表した「指定相当の埋蔵文化財リスト(第一期)」に登録されました。令和6年(2024)度には総括報告書を刊行し、保存計画を進めます。

傑出した土器造形 ～優れた収蔵品の保存公開施設として

井戸尻文化の広がりの中でも、八ヶ岳西南麓を中心とする中部高地の優れた造形の土器や土偶は、日本列島の縄文文化を代表するものとして国の内外に知られてきました。平成30年(2018)5月24日には「星降る中部高地の縄文世界―数千年を遡る黒曜石鉾山と縄文人に出会う旅―」として長野・山梨の18の市町村・団体が日本遺産に認定されるなど、ますますその注目度は高まっています。

井戸尻考古館には膨大な量の縄文遺産が収蔵・展示されています。「土器を見るなら井戸尻へ」といわれるほど、列島の他の地域にはない造形豊かな土器が多く、国の重要文化財に2件(総数200点)、長野県宝に2件(総数12点)が指定されています。

毎年各地の博物館に貸し出され、縄文時代を代表する土器として、図録や書籍に掲載されているのです。



藤内遺跡出土品(国重要文化財)

(2) 富士見町の「まちづくり」の中で

富士見町で策定された様々な計画の中で井戸尻考古館は、文化財保護と生涯学習の場として、また交流促進の拠点、観光拠点となるべき施設として位置付けられています。

第6次 富士見町総合計画基本計画（前期）（2023～2026 年度）

政策 1 施策 1-3 生涯学習の推進と環境の充実 ⑥文化遺産等の保護、伝承、活用

「井戸尻縄文文化については、学習・教育・文化体験・観光・信濃境駅周辺の地域活性化など、他分野に相乗効果を生む施設として井戸尻考古館を再整備するとともに、井戸尻遺跡の保存や活用のための調査研究を進め、その成果を発信していきます。さらに、本町の縄文遺産群や日本遺産事業等とも連携を深めながら、歴史と文化の学びの拠点として魅力的な活動の磨き上げを行います。」

第 2 期 富士見町まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和元年度）

第 2 編 第 3 章 基本目標 2 交流 まちの魅力による新たな人の流れの創出

（1）地域資源を活用した商品開発等の観光戦略構築

「井戸尻をはじめとする町の縄文遺跡群や重要文化財などの歴史・文化的遺産、自然環境を観光資源として、活用します。近年評価の高まっている井戸尻考古館と周辺を新たな観光拠点として整備するとともに、天候に左右されない観光地を目指し、悪天候時の観光商品も検討します。」

第 2 次 富士見町都市計画マスタープラン（2020～2039 年度）

第 4 章 4 東部地区のまちづくり構想

歴史文化交流拠点の形成 本地域に位置する井戸尻考古館周辺を「歴史文化交流拠点」として位置づけ、歴史・文化資源を活かした交流促進の場としての機能の維持・充実を図ります。

富士見町景観形成基本計画（平成 13 年度）

第 3 章-3-（4）歴史・文化景観 施策 歴史まちづくりをテーマとした景観整備

「富士見町の歴史資源としての井戸尻考古館周辺地区については、境市街地や周辺集落地、緑地と一体となった、歴史まちづくりのテーマに沿った景観整備を進めます。」

富士見町公共施設再編方針（2019 年）

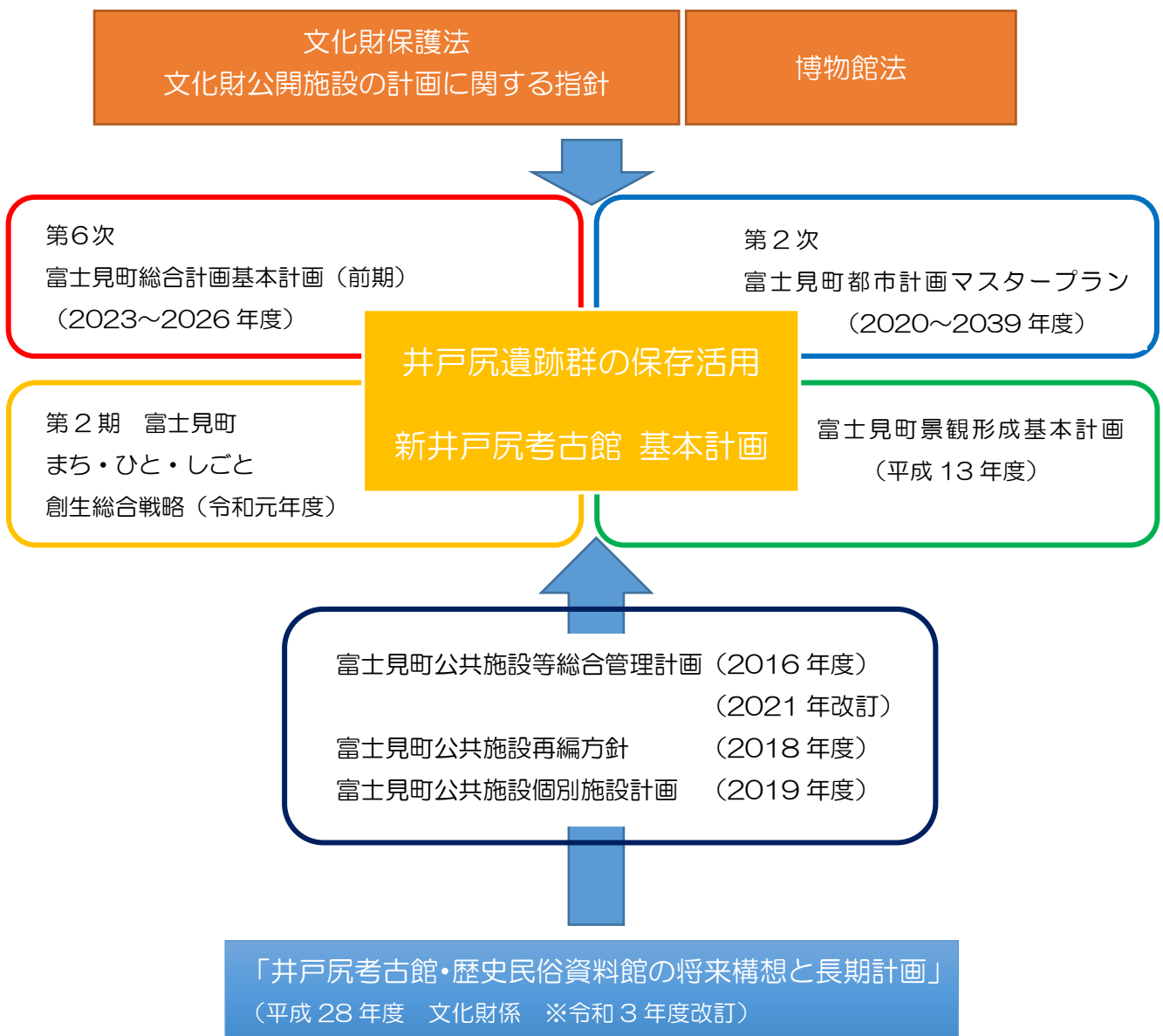
第 3 章 8 社会教育系施設（2）施設ごとの今後の対策

77・78 井戸尻考古館（考古館・収蔵庫）「現在地での改築を目指し、実行時期や財源について第 1 期中（～2026 年）に検討を進める。」

79 歴史民俗資料館「井戸尻考古館と併せて検討する。」

○ 関係法令ならびに構想・計画

- ・文化財保護法(昭和25年5月30日法律第214号)
- ・博物館法(昭和26年法律第285号)
- ・文化財公開施設の計画に関する指針(平成7年8月文化庁文化財保護部)
- ・富士見町文化財保護条例(昭和39年9月30日条例第37号)
- ・富士見町文化財保護条例施行規則(昭和39年10月26日教委規則第15号)
- ・富士見町考古館並びに歴史民俗資料館設置及び管理条例
(昭和61年3月25日条例第4号)
- ・富士見町考古館並びに歴史民俗資料館設置及び管理条例施行規則
(昭和49年3月23日教委規則第1号)
- ・「井戸尻考古館・歴史民俗資料館の将来構想と長期計画」(平成28年 文化財係)



(3) 施設の概要と課題

① 井戸尻考古館(延べ床面積688㎡)+収蔵庫(延べ床面積240㎡)

施設:現在の井戸尻考古館は昭和49年(1974)5月に開館し、令和6年に建館50周年を迎えました。質・量ともに傑出した資料を収蔵展示した、縄文中期の専門館です。昭和30年代からの考古地域史研究の蓄積を有し、日本列島の縄文研究をリードしてきました。現在も縄文農耕論と縄文図像論に代表される独自の展示テーマを掲げています。

また南に秀麗富士、眼前に甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山といった南アルプスの山並み、背後に八ヶ岳を背負う風光明媚な場所に建ち、訪れる人々に安らぎと悠久の歴史に浸る感覚を与えています。

課題:重要文化財、長野県宝をはじめとする貴重な資料を保管・収蔵しながら、

①地震防災 ②紫外線対策 ③温・湿度管理 ④防犯対策などの不備が指摘され、文化庁や県教委から改善を指導されてきました。また収蔵庫と併せても過去の発掘調査資料などの収蔵スペースが限界を超え、管理状態も良くありません。さらに収蔵庫は平成23年(2011)の耐震診断で「耐震不適格」と診断されました。早急に建て替える必要があります。

② 歴史民俗資料館(延べ床面積964㎡)

施設:富士見町の“石の時代”に特化した井戸尻考古館に隣接して、昭和61年(1986)7月に歴史民俗資料館を開館し、町の“鉄の時代”も理解することができるよう務めています。近隣の民俗資料館と比較しても展示されている資料の量、質ともに非常に充実していると、県教育委員会からも評価され、とりわけ資料の保存状態の良さが指摘されてきました。

課題:平成29年(2017)度に外壁補修工事を行いました。屋根裏の換気口増設工事などが実施できずにいます。また考古館同様、収蔵能力は限界に達しており、平成30年(2018)には旧落合小学校の空き教室(5室)に資料を移動・収蔵しました。

井戸尻考古館は展示施設であると同時に、富士見町の埋蔵文化財の発掘調査や研究を通して、保存・活用・普及をはかる拠点施設でもあります。出土品の整理作業や研究をするための作業スペースと、膨大な資料を収蔵する空間が十分ではありません。

社会の急速な変貌にともなって、埋蔵文化財をはじめとする文化財の活用も積極的に進められるようになり、世の展示施設の姿勢は参加・体験型へ、遊びとくつろぎの空間や多面的展示手法の重視、デジタル設備を駆使したバーチャルリアリティー空間の演出などへと大きく変わっています。地域の歴史遺産活用のために必要不可欠な井戸尻考古館ですが、いまや古い世代の博物館であり、時代遅れの施設となっています。

国重要文化財や長野県宝をふくむ重要な文化財を適切に保存・管理し、井戸尻遺跡群をはじめとする遺跡の保存と活用を進めるためには、井戸尻考古館は必要不可欠な施設であり、新世代の施設への全面改築が避けて通れないと考えられます。

(4) 新考古館のめざす姿

上記のような課題を解決し、新時代の施設として発展するために、どのような施設が望ましいのか、令和元年(2019)度より任意の検討委員会を立ち上げて検討を進めてきました(明日の井戸尻検討委員会)。委員会からは次のような意見が示されました。

- ・ 井戸尻考古館は収蔵庫、歴史民俗資料館と一体の施設として新築する。
高原のミュージアムをはじめ、他施設も複合することもある。
- ・ 場所は館西側付近が理想。
南中学校跡地は買い上げと造成の必要がなく候補となりうるが、課題あり。
- ・ これからの時代に即した体感型博物館機能、十分な収蔵庫とともに、
“遺跡の保存”“景観を守る”ことを柱にした新館構想を。

この意見と、現在の館が抱える問題を基に、新しい井戸尻考古館は次のような施設として整備される必要があります。

- ① 遺跡を守り調査・研究する、埋蔵文化財センターの機能を有する「調査・研究施設」。
- ② 貴重な縄文遺産を適切に保存展示し、井戸尻文化の中心地として研究成果を広く発信する「考古地域博物館」の役割を果たす施設。
- ③ 学校や地域団体と連携して普及・公開に努め、積極的に文化財を活用しながら、教育と地域活性化に資する「学習・発信施設」。

この三つの柱を

- ① 我々はどこから来たのか(過去を学ぶ)
- ② 我々は何者なのか(現在を知る)
- ③ 我々はどこへ行くのか(未来を考える)

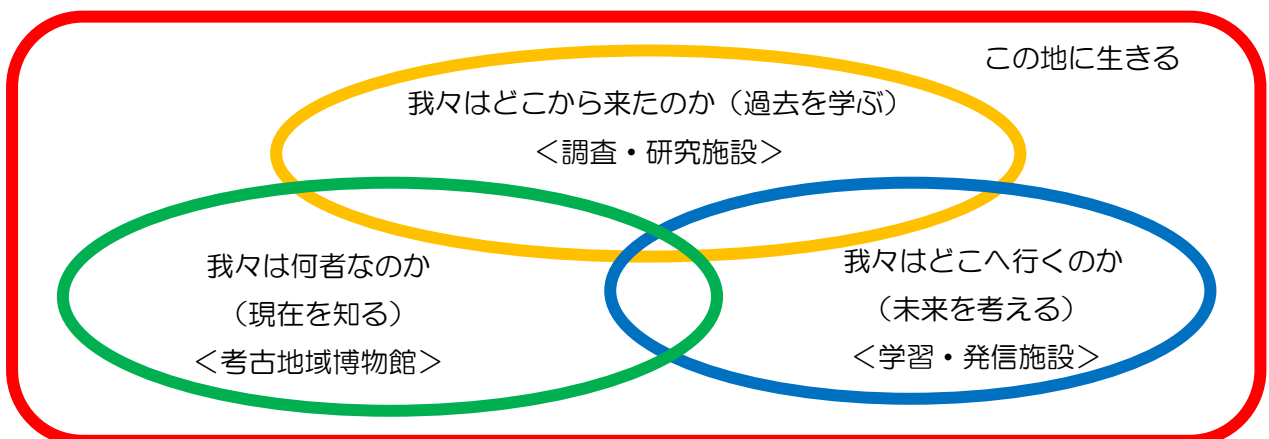
という、新考古館の目指す姿として位置付けます。

そしてもう一点、周辺の重要遺跡と類まれな井戸尻周辺の景観を保全するために、

- ④ この地に生きる というコンセプトを加えることが求められます。

これにより新井戸尻考古館の基本理念を以下のように定めます。

【基本理念】 過去を学び、現在を知り、未来を考え、この地に生きる



(5) 新考古館の基本方針

① 我々はどこから来たのか(過去を学ぶ)

1 埋蔵文化財の発掘調査・保護

富士見町域には、今も多くの遺跡が埋もれています。とりわけ列島を代表する貴重な縄文遺産の発掘調査と研究を行い、未来に守り伝えることが何より重要です。

2 調査研究

継続した調査研究を行うことで、新たな事実の発見や文化財の価値を引き出します。

3 資料の収集・保存・管理

町の調査・研究施設としての役割を果たすため、発掘調査によって得られた資料の整理・保存につとめます。また地域の民俗資料等も町民の財産として収集・保存し適切に管理します。

② 我々は何者なのか(現在を知る)

1 展示公開

常設展示は発掘調査による出土品を中心に展示します。「井戸尻文化の中心舞台」を基本テーマとし、館の歴史を振り返る「おらあとうの考古学」に館の研究の柱である「縄文農耕論」と「縄文図像論」の3つのテーマ別展示とします。縄文時代を中心に歴史民俗資料館と連動して、富士見町の歩みが学べる考古地域博物館とします。

③ 我々はどこへ行くのか(未来を考える)

1 学習・普及

町の財産を未来に継承するため、調査研究の成果を、講座や講演会・体験活動などを通じて町民と共有します。また学校との連携を深め、郷土の歴史に対する子どもたちの理解を深めます。

2 情報発信と地域活性化

最新の研究成果を踏まえた情報の発信と、展示公開を行います。また縄文遺産を地域の誇りとし、郷土を愛する心を醸成することで、地域の発展に寄与します。

④ この地に生きる

1 井戸尻遺跡群と環境の保全

①から③の基本理念に加え、井戸尻遺跡周辺の景観や環境を保全する旗頭としての機能が求められます。富士山、甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山などの眺望と、昔ながらの田園風景は、「縄文の文化香る井戸尻遺跡」として平成29年(2017)、「信州ふるさとの見える(丘)」に認定されました。

2 この地に生きた先人達に学び、風土と文化を未来に継承します。

第2章：施設計画

(1) 施設計画の方針

新考古館の基本理念「過去を学び、現在を知り、未来を考え、この地に生きる」を実現するために、以下の方針で施設計画を作成します。

① 遺跡を守り、調査研究する「調査・研究施設」

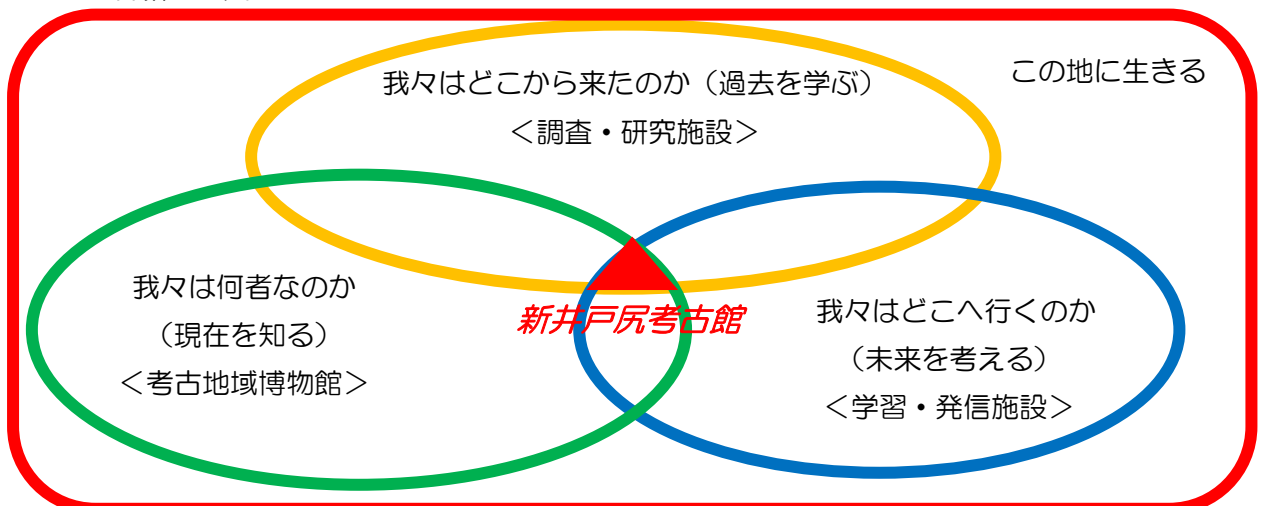
- ・ 調査・研究と保存を行うため、必要な空間と設備を備えた施設として整備します。
- ・ 博物館と別組織ではなく、最新の発掘調査の成果や研究が展示に反映できるような施設整備を行います。

② 貴重な縄文遺産を適切に保存展示し、井戸尻文化の中心地として研究成果を広く発信するとともに、町の歴史を伝える「考古地域博物館」の役割を果たす施設

- ・ 重要文化財、長野県宝など重要な縄文遺産を保存展示するために必要な設備を整え、発掘調査の成果が速やかに公開できるような施設とします。また博物館法第2条第1項に定める登録博物館とします。
- ・ 縄文から現代につながる歴史を、井戸尻文化を中心とした考古資料に学び、既存の民俗資料館と一体の施設として、町の歴史を学ぶことができる展示室を備えます。

③ 学校や地域団体と連携して普及・公開に努め、積極的に文化財を活用しながら、教育と地域活性化に資する「学習・発信施設」。言い換えれば“社会教育の拠点”であり、町の“観光資源”となりうる施設

- ・ これまでの展示の更なる磨き上げを行い、井戸尻考古館としての情報発信をし、学校の団体の受入れや体験ができるスペースを確保します。
- ・ 質の高い学びと共に、観光客がくつろぎ楽しめる施設とし、富士見町の歴史・文化・自然に関する情報を発信・提供することで、富士見町の魅力を伝える観光資源としての施設を目指します。



(2) 財源と施設整備の考え方

① 財源

- ・ 遺跡の保存活用を図りながら博物館施設を建設する事業に活用できる補助制度がないため、起債事業として進めます。新館計画に関しては総務省が推進する地域活性化に関する起債「**地域活性化事業債(地活債)**」が最もふさわしいと考えられることから、これを活用します。 ※地活債＝充当率 90% 交付税算入率 30%

また内閣府の「**デジタル田園都市国家構想交付金(地方創生拠点整備)**」などの交付金が活用できるよう、事業を進めます。

② 施設整備の考え方

- ・ 現在の井戸尻考古館と収蔵庫は、曽利遺跡の上に建てられています。事業の目標として曽利遺跡の保存と、史跡公園としての活用を掲げるため、現地での建て替えは行わないことを前提とします。
- ・ 現在の井戸尻考古館(688 m²)に収蔵庫(240 m²)を加えた 928 m²をベースに、約 920 m²の面積を想定します。
- ・ ここに現在行っている発掘出土品などの整理作業空間(調査・研究施設)分 180 m²を加えた、1,100 m²を最終的な延べ床面積とします。

③ 歴史民俗資料館の活用

- ・ 昭和 61 年に開館した歴史民俗資料館の建物は耐震上も問題がないとされているため、そのまま歴史民俗資料館として開館、活用します。新井戸尻考古館との連絡や、利用者の動線は十分検討します。
- ・ 歴史民俗資料館2階の伝習室は、そのまま会議や小規模な講座が開ける施設として有効活用します。

④ 民俗資料の収蔵

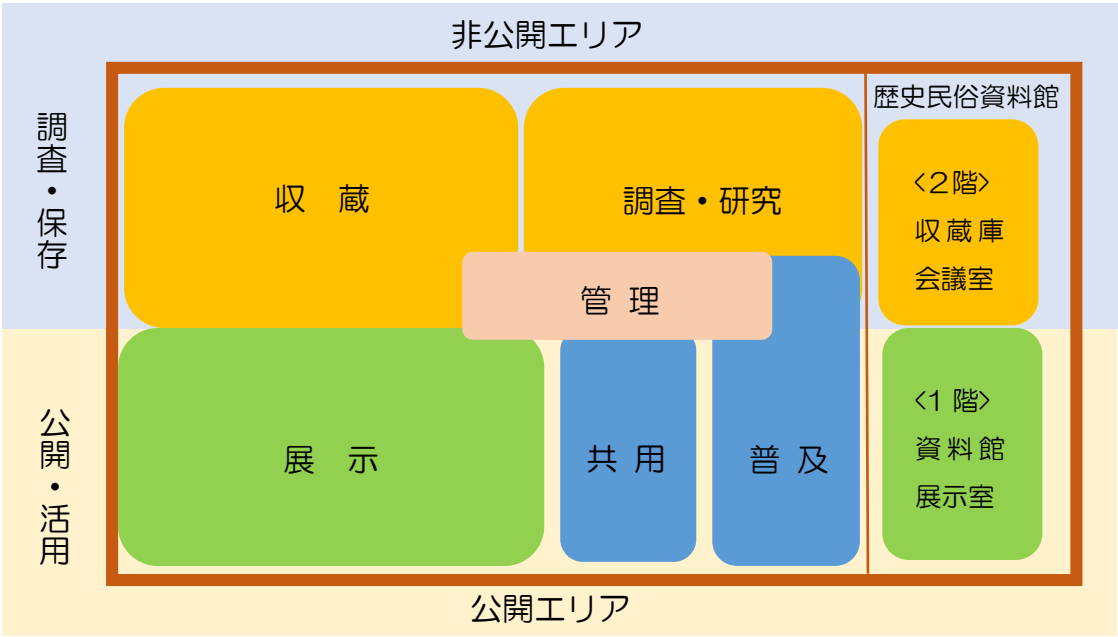
- ・ 現在、農具を中心とした大型の民俗資料は、旧落合小学校の教室5部屋に分散して収蔵しています。旧落合小学校校舎が利用できる間は、ここに保管をします。生活用具などの細かな資料は、現在の民俗資料館の収蔵庫をそのまま使用します。



歴史民俗資料館

(3) 想定される規模・建築面積

区分		エリア	概 要	見込面積(㎡)	割合
収蔵・研究施設		収蔵庫	土器・石器など出土品 215 図面・写真資料など 70 その他 30	315 (現在 240)	28.7%
		調査研究室	埋蔵文化財整理・管理 71 図書資料室 74	145	13.2%
		器具庫	発掘機材ほか 30	30	2.7%
地域博物館		展示室	常設展示室 345 企画展示スペース 30	375 (現在 272)	34.1%
学習・発信施設		普及活動	講座・会議スペース 伝習活動室 40	40	3.6%
		共用	ホール・ロビー 40 情報発信スペース 5 トイレ 40	85	7.7%
管理運営		管理	受付・事務室 25 会議室・応接室 35 機械室 30 倉庫など 20	110	10%
			合 計	1,100 ㎡	100%



(4) 立地環境

① 予定地について

現在、井戸尻考古館が建てられている場所は曾利遺跡の中心部であり、遺跡の保護を重視すれば、現在地での建て替えは不可能です。「明日の井戸尻検討委員会」では現在の館周辺で、数箇所の候補地を検討し、おおよそ 2 箇所に絞り検討しましたが、いずれも不調でした。改めて今回の計画を総合的に整理し、候補地には以下の点が求められました。

- ・ 現在の井戸尻考古館(井戸尻遺跡)に近いこと(池袋区内が望ましい)
- ・ 将来的に歴史民俗資料館と一体の施設として管理できること
- ・ 新館を建設するに足る面積があり、駐車場が整備できること
- ・ 大規模な造成工事・インフラ整備が不要であること
- ・ 井戸尻遺跡の眼前に広がる、地域の景観を守る拠点となること

以上の点を踏まえると、現在の井戸尻考古館の南西側、曾利遺跡に隣接する農地(民有地)が建設予定地として最適であると判断され、建設予定地と決定しました。



② 予定地の概要

- ・ 面積 $6,304 \text{ m}^2$ (田 $6,304 \text{ m}^2$) + $2,332 \text{ m}^2$ (田 $2,332 \text{ m}^2$) = $8,636 \text{ m}^2$
- ・ 標高 約 860m
- ・ 上下水道 接続可能



予定地近景(南西上空より)



予定地近景(北東より)



予定地近景(南より)



全体イメージ(画:若狭宣子)

(5) 建築計画

文化庁が定めた「文化財公開施設の計画に関する指針」(平成7年8月 文化庁文化財保護部)に沿った、国指定文化財の保管・公開に適切な施設とします。(公開承認施設に準ずる施設)

① 配置

- ・ 新館の正面はおおむね南を向くこととし、館の南側に十分な台数分の来館者駐車場を確保します。
- ・ 大型バスが駐車できる駐車スペースを確保するとともに、出土品や機材の搬入に必要な動線(美術品輸送専用車4tが通行できる)を確保します。
- ・ 電線や電柱など景観や眺望を遮るような施設は、視界に入らない配置とするよう工夫します。
- ・ 駐車場の出入口が、道路のカーブにあたるため、視認性の良さなど、安全を確保します。
- ・ 隣接する史跡公園や歴史民俗資料館が利用しやすい配置と動線確保を考えます。
- ・ 将来、収蔵品が増加した際に収蔵庫を増築できるスペースを確保します。

② 平面計画

- ・ 来館者の動線、搬入や整理用の動線に配慮して、展示・普及活動の機能と収蔵・整理・研究の機能を配置します。
- ・ 展示・普及活動スペースは、ホール・ロビーなどを介して外部環境との連続性を大切にし、来館者が親しみ、活用しやすい配置とします。
- ・ 体験プログラムのためのスペースは、一部を屋外に設置し、庇や雨よけを工夫し、雨天時でも対応できるようにします。

③ 立面計画

- ・ 周辺の地形や環境に配慮した素材・形状・色彩とします。また遺跡周辺の景観を守る拠点とするためにも、建物の形状や高さは周囲になじむものにします。
- ・ 地形の高低差などは活かしつつも、バリアフリーの視点から動線を確保し、安全で利用しやすいものとします。
- ・ 一部地下に収蔵施設、地上に展示室などを配置します。

④ 断面・内装計画

- ・ ホールは開放的な雰囲気大切にする一方で、展示室や収蔵庫は資料保護のため外光の入らない構造にします。
- ・ 特に収蔵庫は資料保護を第一に考え、温湿度変化の少ない配置と構造を考えます。

⑤ 構造計画

- ・ 貴重な文化財を数多く収蔵・展示する施設として、また大勢の利用者が集まる施設として、耐震性、耐火性に優れたものとします。同時に防犯性に優れ、安全性を備えた施設とします。
- ・ 災害発生時には、文化財保護、利用者の安全確保とともに、地域住民が頼ることのできる施設とします。
- ・ 展示室は観覧機能を重視し、柱の少ない構造を検討します。耐荷重も配慮します。
- ・ 一般来館者の使用する館内は、下足の履き替えが不要なものとして。

⑥ 設備計画

- ・ 機械設備や電気設備、什器については環境に配慮したものとして。
- ・ 初期費用だけでなく、その後の維持管理費用についても十分配慮した計画とします。

⑦ 環境に配慮した建築計画

- ・ これからの公共施設として、高断熱ガラスの採用や日射遮蔽による熱負荷の低減、自然採光、自然通風などの省エネルギー対策、太陽光発電など創エネルギーに十分配慮したものとして整備します。
- ・ 富士見町境地区は厳冬期の最低気温が氷点下 10 度以下となり、北西からの風が強く当たります。寒冷地、高冷地仕様の建物構造にするとともに、出入口の開口部方向、風除室の設置などに十分配慮したものとして。
- ・ 晴天率の高さは、ガラス窓などの活用により、施設内を明るく暖かい空間に出来る一方、文化財の保護や日常業務に支障をきたす可能性もあるため、当地の気候条件に合った適切な建築物となるよう計画します。
- ・ 屋根はできるだけシンプルなものとし、降った雨水や雪が屋根上にとどまらず、速やかに落下する構造とします。



(6) 施設の機能

① 展示機能

- ・ 常設展示室: コンピューターを用いた映像システムなどは原則使用せず、井戸尻文化の調査研究成果を軸に、出土品と向き合う展示を行います。
国重文、県宝を中心とした土器造形とそこに垣間見える「縄文人の思い」に迫る展示とします。
- ・ 企画展示室: 発掘調査の成果速報などを紹介する小規模な展示スペースとします。
独立した部屋で、扉の開閉で常設展示室に接続できるようにします。

② 収蔵機能

- ・ 発掘出土資料(出土品+調査記録)の保存に対応した空間を確保します。
- ・ 調査図面や記録写真の保存のため、温湿度管理システムの導入を検討します。
- ・ 収蔵庫は可動式の棚や立体空間を利用し、収蔵量を増やす工夫をします。
- ・ 国指定文化財や重要考古資料を収蔵する、特別収蔵室を設けます。
- ・ 展示替え等で使用していない展示ケースなど、機材を収納する空間を確保します。

【今後の収蔵量増加の見通し】

直近の5年間で合計9遺跡の発掘調査を行い、整理用コンテナで143箱の資料を収蔵しました。年平均で約30箱の増加率。
仮に30箱を10箱3列として収蔵した場合、必要な面積は0.72㎡/1年(箱面積0.24㎡)となります。

直近5ヵ年の収蔵量		
年度	箱数	遺跡数
令和元年度	25箱	3遺跡
2年度	29箱	1遺跡
3年度	45箱	2遺跡
4年度	15箱	2遺跡
5年度	29箱	1遺跡

③ 調査研究機能

- ・ 主に埋蔵文化財の整理、調査・研究を行います。
 調査・研究室: 出土資料などを整理するスペース。製図や遺物の実測を行う部屋と、土器の洗浄や接合を行う空間とします。写真撮影場所も確保します。
 必要に応じ、学芸員が研究や展示準備を行う博物館の研究スペースとします。
- ・ 図書資料室: 調査・研究成果や町の歴史に関わる書籍・写真などを保管します。
可動式の棚や立体空間を利用し、収蔵量を増やす工夫をします。

④ 学習支援機能

- ・ 小中学生をはじめとした団体客へのガイダンスを行うスペースを設けます。ロビー、ガイダンス、会議など、時と場合によって様々な用途に使える空間を確保します。
- ・ 体験学習のできる空間を確保します。小中学生や団体の体験の受入れをするもので、完全屋内ではなく、雨天時にも活用できるスペースを工夫します。

⑤ 集客観光機能

- ・ 観光客がくつろぎ楽しめる空間と、周辺の景観や自然環境を楽しめる施設とします。

⑥ 地区コミュニティ機能

- ・ 地区の人々の交流の拠点として活発な交流を促進できるよう、情報発信のスペースを確保します。

⑦ 管理機能

- ・ 事務室、応接室のほか、管理に必要な機能を整備します。

⑧ 新考古館 DX 構想

- ・ 井戸尻考古館が抱える課題を解決し、来館者ならびに外部から情報にアクセスする利用者のために、考古館機能の一部の DX(デジタルトランスフォーメーション)化を推進します。

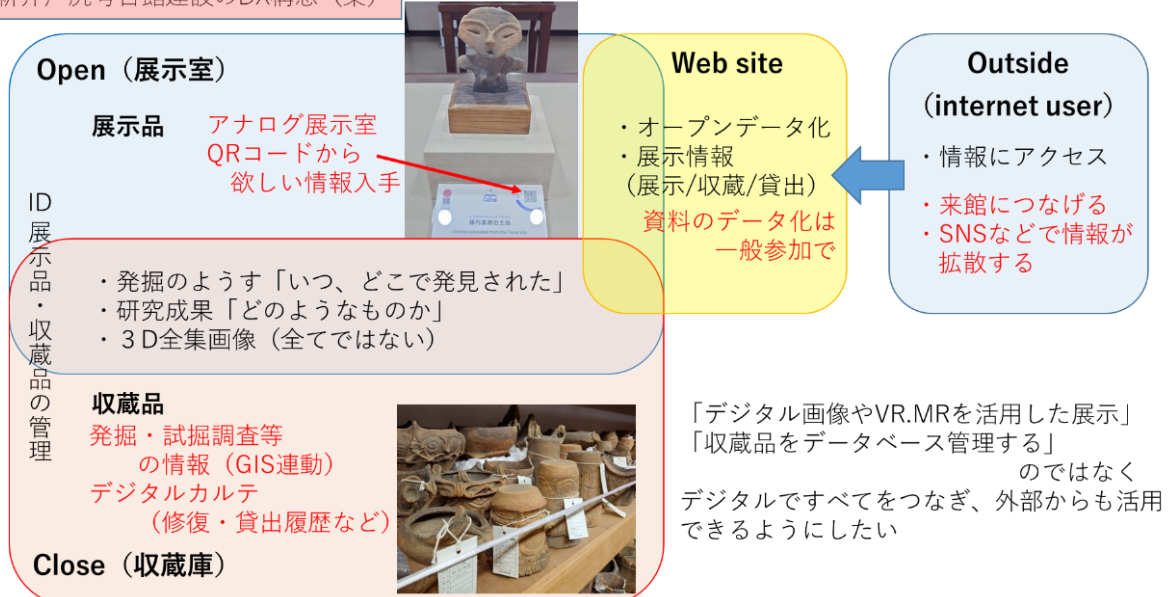
新しい展示の工夫と利用者の利便性を高める

- a) 固定的なパネルによる解説を減らし、展示品と来館者が向き合い、自ら考える展示（極力アナログな展示）
- b) 出土場所や出土状況など掲示できないエピソードや情報を盛り込む
来館者の興味や関心、理解度に合わせた情報の提供
- c) 遺物の反対面や土器の全周を見たい人は3D データの閲覧も可能

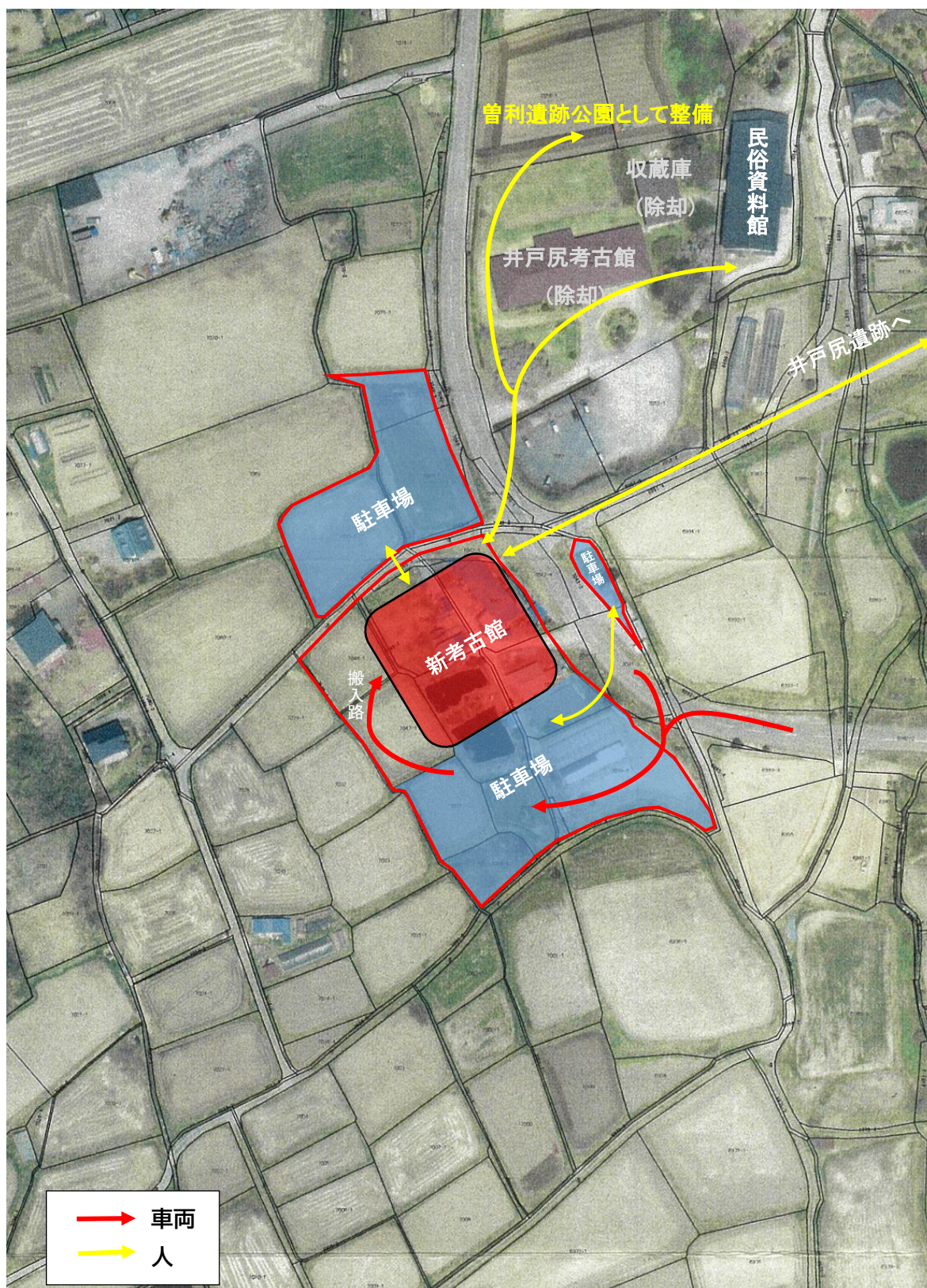
過去の調査情報と出土品の適切な収蔵・保存・管理

- a) 歴代職員の“記憶“に頼る収蔵 → すぐに必要な情報が取り出せるように
- b) 資料の修復歴、貸し出し履歴など、紙ベースの台帳からデジタルのカルテへ
- c) 増え続ける資料と情報、研究成果を、過去の情報とリンクさせる

新井戸尻考古館建設のDX構想（案）



(7) 配置イメージ





新考古館イメージ(北より)



新考古館イメージ(西より)

第3章：展示計画

(1) 展示の方針

新井戸尻考古館の展示には、現在の展示をベースに大きく3つのテーマが考えられ、これに基づいて展示室を構成します。専門の業者に展示全体の製作を委託せず、自らの手でこれを構成します。

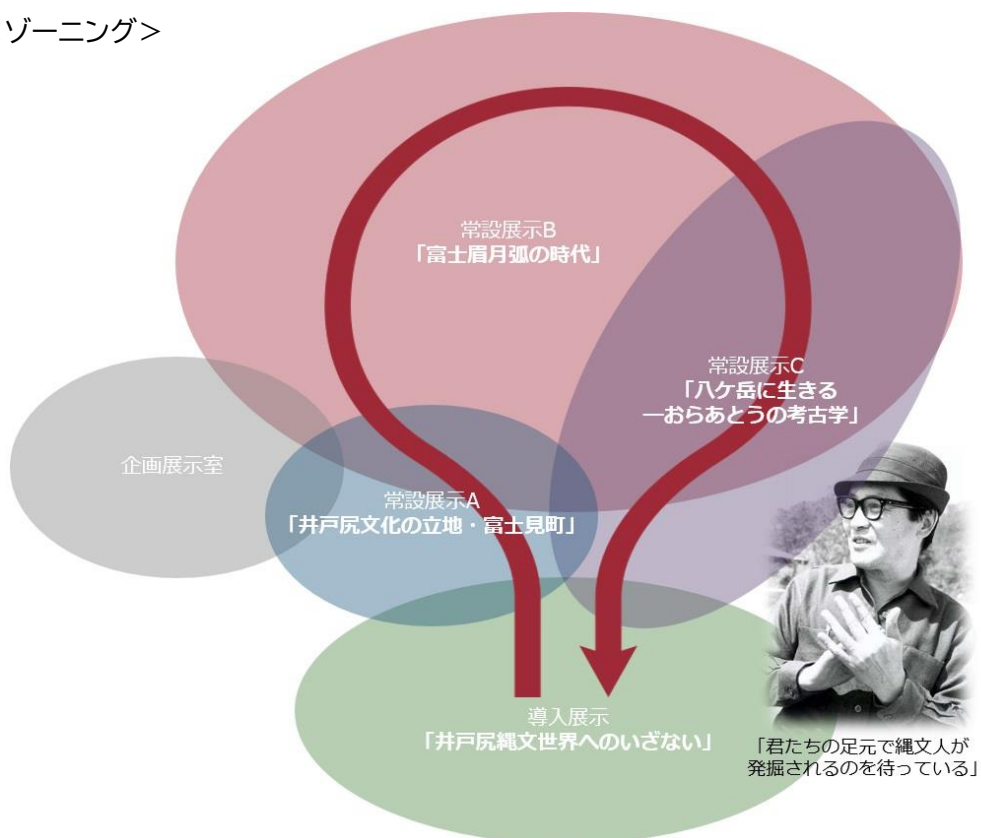
<主眼>

- ① 貴重な縄文遺産を収蔵展示し、井戸尻文化についての研究成果を発信する。
- ② 町内の埋蔵文化財(遺跡)について、結果や調査に基づく研究を公開する。
- ③ 「おらあとうの考古学」 地域で培われた研究の展示。

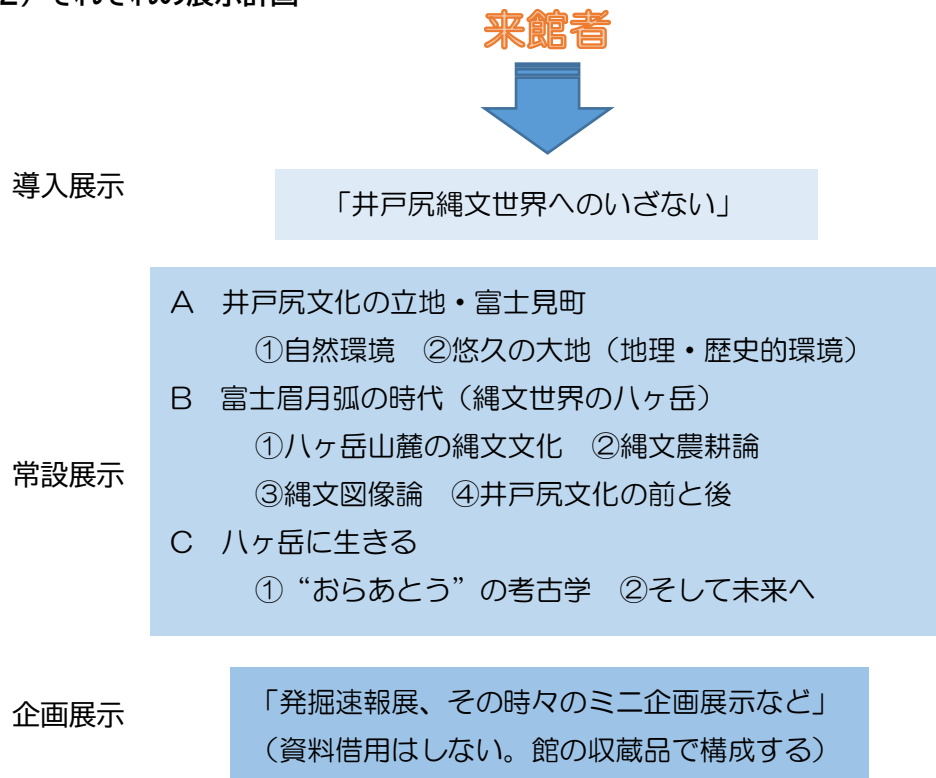
<構成素案>

- ・ 導入展示 「井戸尻縄文世界へのいざない」
- ・ 常設展示 「井戸尻文化の立地・富士見町」(自然環境・悠久の大地)
「富士眉月弧の時代」(縄文世界のハケ岳)
「ハケ岳に生きるーおらあとうの考古学」
- ・ 企画展示

<ゾーニング>



(2) それぞれの展示計画



(3) 展示の構成とテーマ

！ 展示計画のポイント

- ・「列島の新石器時代中期の生活文化(＝井戸尻文化)を解明する
- ・中央の高名な学者ではなく、地元の人々が進めた「おらあとう(＝俺たち)の考古学」
- ・「井戸尻文化」研究と発信の専門館(縄文農耕論・縄文図像論が二つの柱)
 - 単に「井戸尻遺跡」「富士見町の遺跡」を紹介する博物館ではない
 - 井戸尻文化という特徴的な地域文化を研究し、発信する“研究拠点”である
- ・現在の展示構成のイメージも大切にする
 - 編年展示と図像展示の融合・ひとつの物語を読むような、ストーリー性のある展示
 - 原則コンピューターシステムは用いないが、理解を助ける映像展示は必要か
 - 遺物の持つ迫力を出し、シンプルに土器と向き合い、自らが想像できる展示
- ・展示室は明るく、土器の文様などがよく見えるようにする
- ・随時、学芸員による展示変更が行える、非固定的な常設展示
- ・井戸尻のもつ「物量感」も大切な要素
- ・導入展示「井戸尻縄文世界へのいざない」と、常設展示のエピローグ「ハケ岳に生きる－おらあとうの考古学」はリンクする
 - 「君たちの足下で縄文人が発掘されるのを待っている」(藤森栄一)
- ・火、水、風、土など、自然のエLEMENTを意識した展示

○ 導入展示(前室のように)「井戸尻縄文世界へのいざない」

！ ポイント:現代から縄文世界へのいざない ～足元に埋もれた真実

- ・ 富士見町内の遺跡分布図
- ・ “採集”された石器や土器片(ハンズオン展示も可能か)
- ・ 「おらあとうの考古学」の出発点
- ・ 写真イメージも用いる(工夫された壁面展示)



○ 常設展示 A 「井戸尻文化の立地・富士見町」

！ ポイント:この地に人が生き、文化が育まれたのは、風土や環境による。

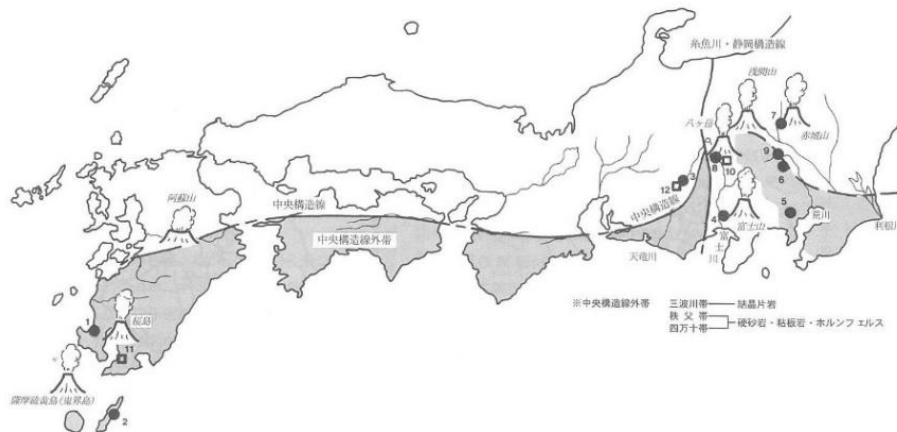
“場所”のイメージを来館者と共有することが、地域文化への理解を深める
きっかけとなる。

① 自然環境

- ・ 南から南西向きの尾根 富士・南アルプスを望む 八ヶ岳南麓(西南麓)
豊富な湧水

② 悠久の大地(地理・歴史的環境)

- ・ フォッサマグナと糸魚川-静岡構造線
- ・ その交点と諏訪湖、八ヶ岳火山
- ・ 中央構造線外帯の岩石
- ・ なぜここに人がやってきたのか(縄文海進と鬼界ヶ島の破局噴火など)



○ 常設展示 B 「富士眉月弧の時代」(縄文世界の八ヶ岳)

！ ポイント:縄文時代中期に中部高地から西南関東に展開していた民族文化の中心地
(文化的中心であるとともに地域文化研究の中心でもある)。

その文化の解説と、研究の視点。 ※『富士見町史』上巻の構成を軸に！

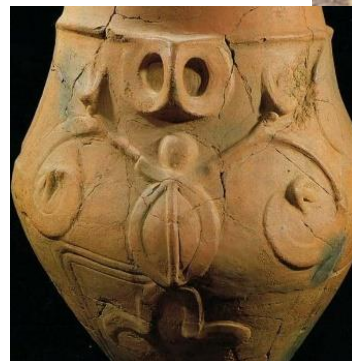
- ① 富士眉月弧と井戸尻文化の八ヶ岳
 - ・ 縄文時代と井戸尻文化(一般的な解説)
- ② 井戸尻文化前史(人は、どこから)
- ③ 井戸尻文化の時代(井戸尻編年に沿って)
 - ・ 中期初頭から末葉までの土器群
 - ・ 標式資料の展示
- ④ 井戸尻文化の終焉(人は、どこへ)



○ 常設展示 C 「八ヶ岳に生きるーおらあとうの考古学」

！ ポイント:縄文時代から“現代(いま)”へ 「私たちとは関係ない大昔」ではない
「おらあとうの考古学」は、体験し、参加し、考え、この土地を未来につなげる
営みそのもの
「私たちはどこから来たのか、何者なのか、どこへ行くのか」
今も昔も、人はこの地に生き続ける
「井戸尻文化に学ぶ知識」を「未来を生きる知恵」に
国際的かつ地域の生活実態に根差した学問

- ① “おらあとう”の考古学
 - ・ 井戸尻遺跡群の調査の歴史と、井戸尻に賭けた人々(研究者)
 - ・ 「おらあとうの村の遺跡は おらあとうの手で掘り
おらあとうの村の歴史は おらあとうの手で明らかに」
→ 地域文化としての「井戸尻文化」
 - ・ 縄文農耕論(山麓に生きた人々)
→ 石器研究 縄文農耕論の“いま”
→ 山地民族の文化
 - ・ 縄文図像論(心の風景の再現・・・『復現』)
→ 世界で最も豪華な土器
→ 土器図像とは
→ 縄文土器を読む
- ② そして、未来へ
 - ・ 「私たちはどう生きるか」



○ 企画展示(常設展と連動 空間としては分離)

！ ポイント:発掘速報展示など、新しい情報の発信と、その時々テーマでミニ企画展示
地域との連携や町民の交流にも活用できるスペースとして
映像・音響などが使える空間(備え付けでなくてよい)
広くなくても良いので、多用途に使える空間としておく



+



参考:朝日遺跡ミュージアム

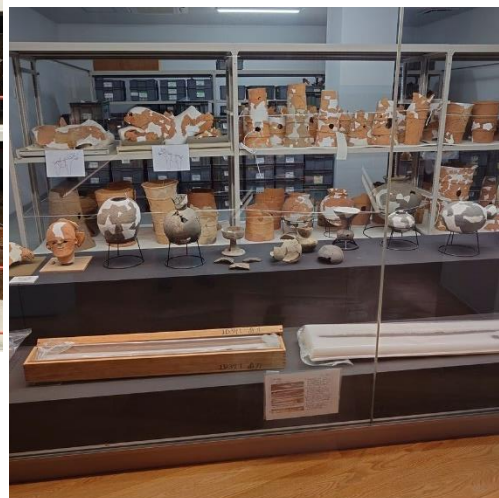
参考:十日町市博物館

○ その他

！ ポイント:展示室も“収蔵スペース”、収蔵庫などバックヤードも“展示スペース”に



参考:三内丸山遺跡センター 収蔵庫(部分)



参考:摩利支天塚・琵琶塚資料館 収蔵庫

(4) 遺跡と展示とが連携する施設計画／活動計画

① 連携する施設計画

「遺跡の景観や環境、井戸尻考古館の独自性が感じられる施設計画の展開」

井戸尻考古館の展示は、地元で結成された“井戸尻遺跡保存会”が中心となって進めてきた調査と、そこから独自の理念で積み重ねられた研究成果が反映された、個性的なものになっています。また遺跡が立地する類まれな景観は、地域の誇りとして人々の生活に大きく影響します。これを施設の個性として計画に反映させることで、これまでの歴史と理念を継承し、さらに高めていこうという姿勢を示すことができます。

② 連携する活動計画

「おらあとうの考古学、

地域と育ちあう活動計画の展開」

考古館の体験プログラムは、「体験のためのプログラム」として準備されたものではありません。館職員の実験的な研究が形になって提供されているものです。

真似事ではない、意味ある体験を通じて、縄文をより深く理解することができます。またそこには、この地に生きた先人たちの知恵も息づいています。風土や地域性を活かした活動を通じて、施設が貴重な伝承や技術を記録し、それを地域に還元するという、育ちあう博物館としての活動が可能になります。



縄文農耕論に基づく石鍬の使用体験



本郷小学校児童による発掘調査体験(札沢遺跡)

第4章：活動計画

(1) 活動計画の概要

遺跡を保存し、文化財を活用する新井戸尻考古館に求められる役割として、

- ① 遺跡を守り、調査研究する「調査・研究施設」。
- ② 貴重な縄文遺産を適切に保存展示し、井戸尻文化の中心地として研究成果を広く発信するとともに、町の歴史を伝える「考古地域博物館」の役割を果たす施設。
- ③ 学校や地域団体と連携して普及・公開に努め、積極的に文化財を活用しながら、教育と地域活性化に資する「学習・発信施設」。

という三つの柱があり、これに基づいた活動計画を展開します。

(2) 活動計画

① 調査・研究施設としての活動

- ・ 町内遺跡の保護に努め、調査研究を進めます。
- ・ 発掘調査(学術調査・記録保存調査)を通して得られた成果を、保存・公開します。
- ・ 発掘調査や研究活動に町民が積極的に参加でき、町全体の遺跡保護意識が高まるように誘発します。



曾利遺跡の試掘調査
(令和3年度)

② 考古地域博物館としての活動

- ・ 国を代表する縄文遺産を収蔵・展示し、大勢の方が縄文に対する理解を深められるようにします。
- ・ これまでに蓄積された研究成果を軸に、地域の誇りとして、他の博物館にはない個性的で独創的な考古館活動を促進します。
- ・ 企画展示やギャラリートークを行い、常に新しい成果を公開します。



ふじみ縄文ウィークエンド
(令和 5 年度)

③ 学習・発信施設としての活動

- ・ 研究をもとに構成された体験プログラムを提供するイベントを開催します。
- ・ 学校や各種団体の受入れに努め、出前授業など資料を活かした活動を行います。
- ・ 文化財を活用した地域連携を行い、地域振興に資するとともに、広く世界に情報を発信し、町の有効な文化拠点・観光資源となるような活動を展開します。
- ・ 地域の人々の交流の拠点として、住民や学校とも連携した活動を行います。
- ・ ふじみ縄文クラブ(仮称)を立ち上げ、町全体で井戸尻文化や歴史遺産の保存・活用の機運を醸成します。



連携イベント「火焰 VS 井戸尻」
令和 5 年度(表参道新潟館ネスパス)

第 5 章：新館建設に向けて

(1) 建設費用の概算 ※ 類似施設の建設費、過去実績などから算出

- ・ 建築延べ床面積 1,100 m² 展示室面積 375 m²を想定しています。

総事業費は現段階での概算であり、今後変動する可能性があります、10 億円ほどを予定しています。

(2) 建設事業スケジュール

新井戸尻考古館は令和 11 年(2029)秋の開館を目指し、以下の事業スケジュールを想定します。

令和 6 年度 用地購入、基本・実施設計プロポーザル

令和 7 年度 基本・実施設計

令和 8 年度～ 建設工事(建築)・展示制作 ※枯らし:令和 9・10 年夏

令和 10 年度～ 展示作業・開館準備

令和 11 年度(2029 年度) 開館

(3) 新井戸尻考古館建設専門委員会名簿

【任期:令和 3 年 7 月～ 】

氏 名	専門等	所属等	委員会職務
北村 皆雄	映像民俗学	株式会社ヴィジュアルフォークロア代表	委員長
中沢 新一	人類学	京都大学こころの未来研究センター特任教授	副委員長
市澤 英利	史跡・考古学	飯田市上郷考古博物館 元館長(県文化審委員)	
小林 公明	考古学	井戸尻考古館 元館長(町文化審会長)	
小池 知笑	教育	井戸尻考古館運営審議会 会長	
功力 喜朗	地元区・建築	池袋区	

※ 建設専門委員会は新たな井戸尻考古館の建設について、専門的な見地から検討し、町長の諮問に応じるものです。諸計画や審議内容については、富士見町教育委員会および井戸尻考古館運営審議会と、その都度共有します。

